

「北月山荘～（仮称；御浜池古道）～御浜池～月山八合目～北月山古道
～北月山荘」周回

探査トレイル結果報告書

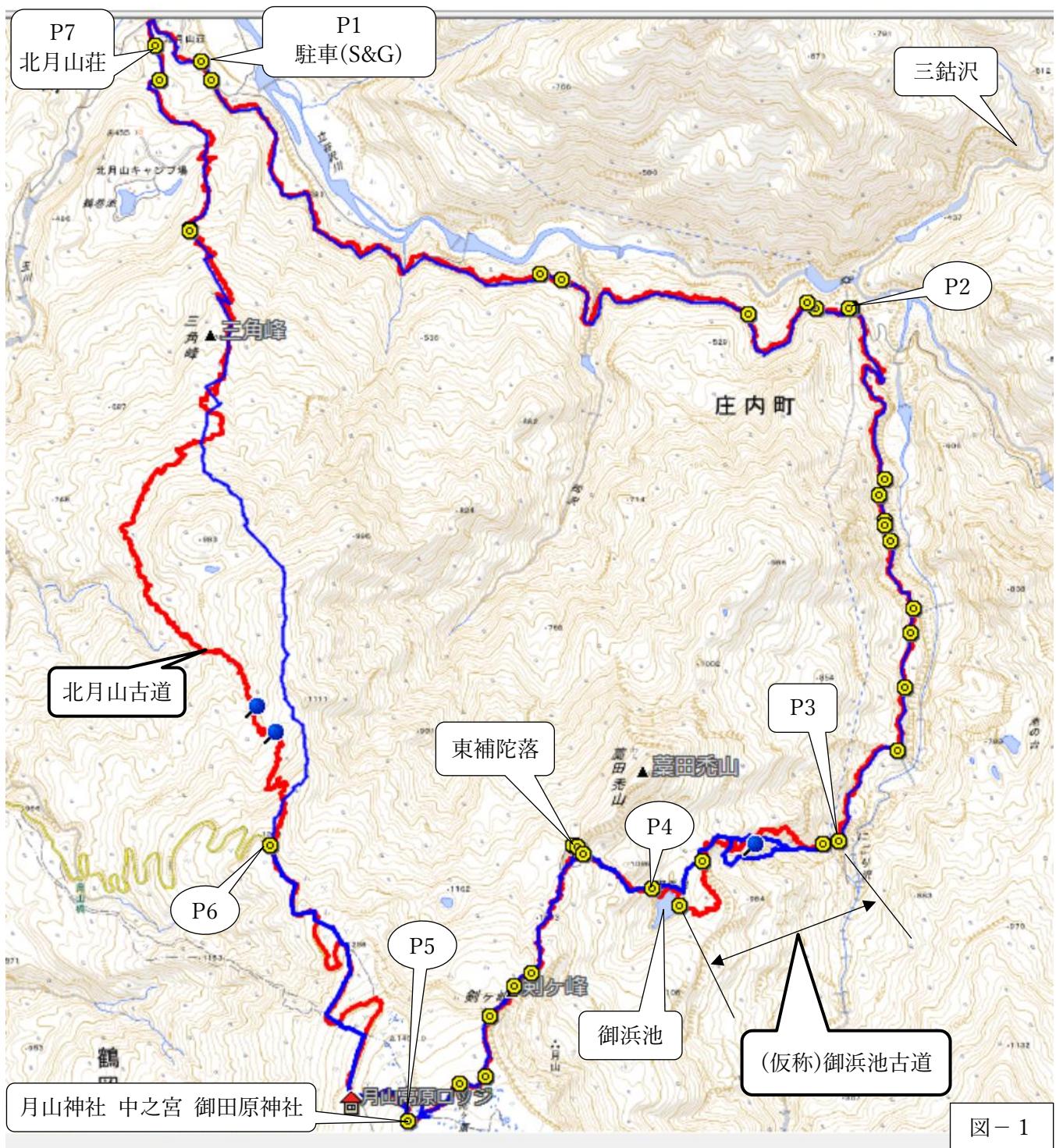
2022(R4)年 7 月 31 日(水)
(記) 大沼 香

2022(R4)年7月10日(日)の結果について概要報告します。

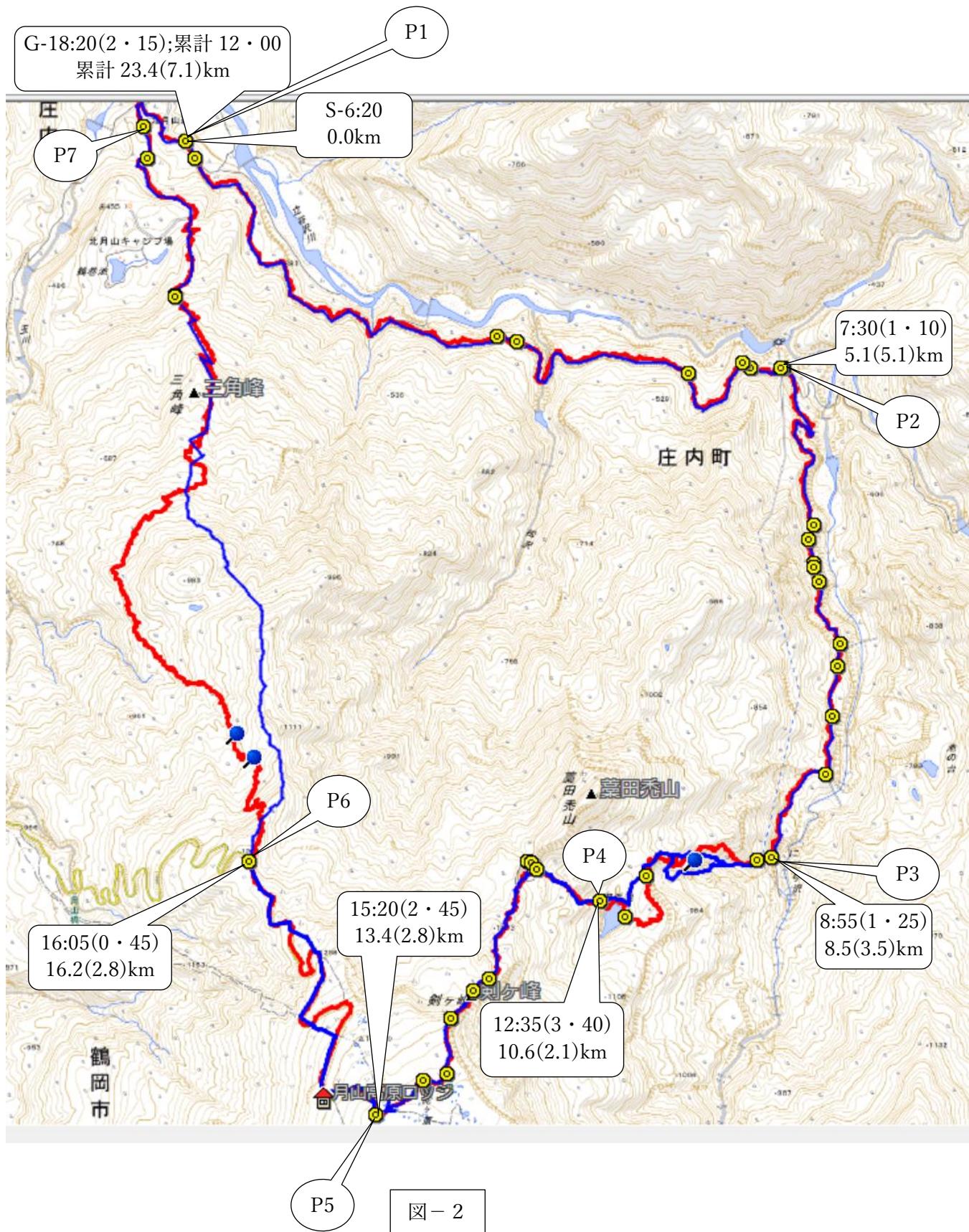
地形図中のくねくねした実線(赤色)は、私が今回踏査したGPSトラックログ(足跡)です。なお、青色は出発前に机上で検討した計画ルートです。

1. 実施結果

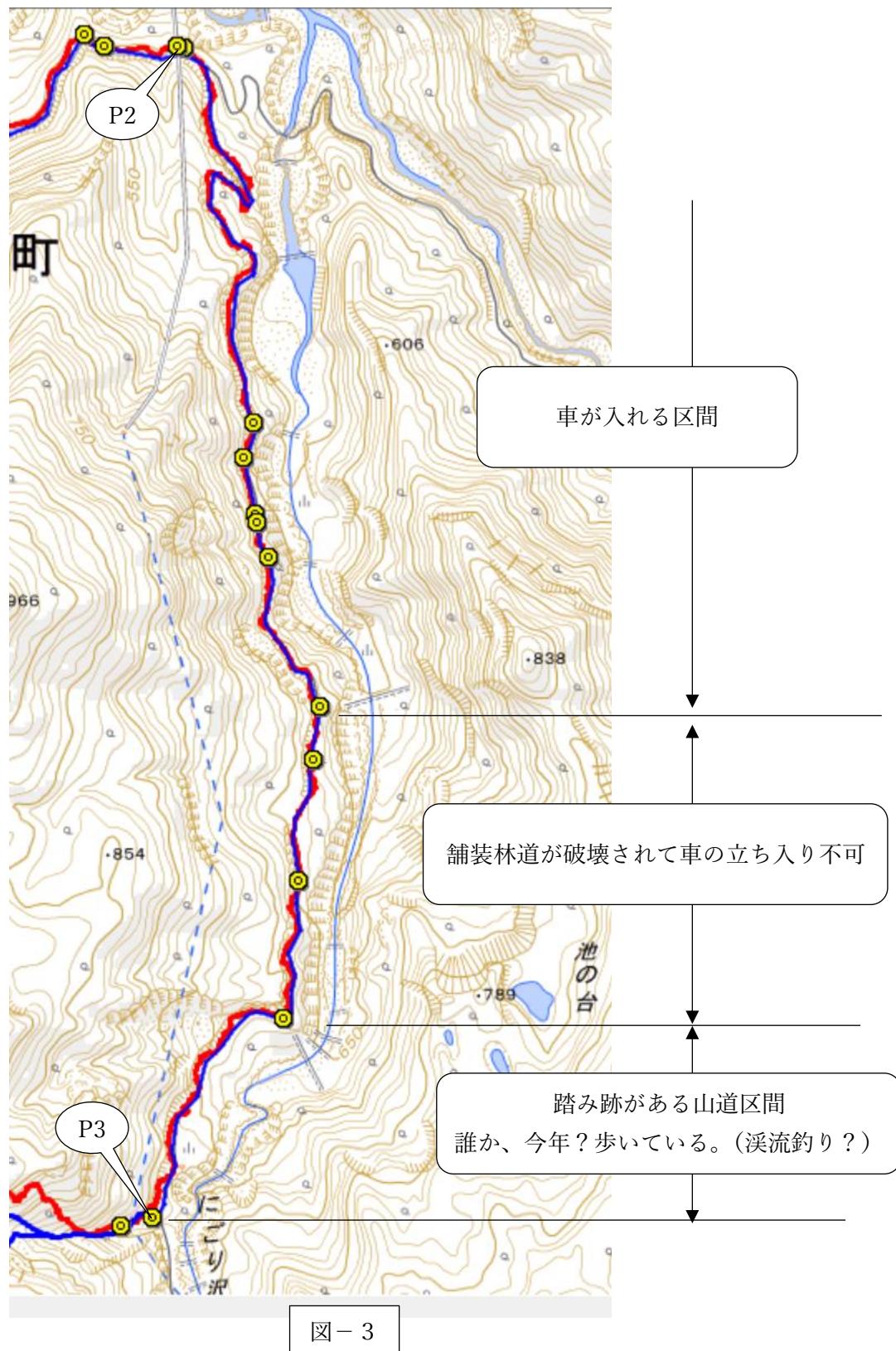
(1) 全体行程は図-1のとおり



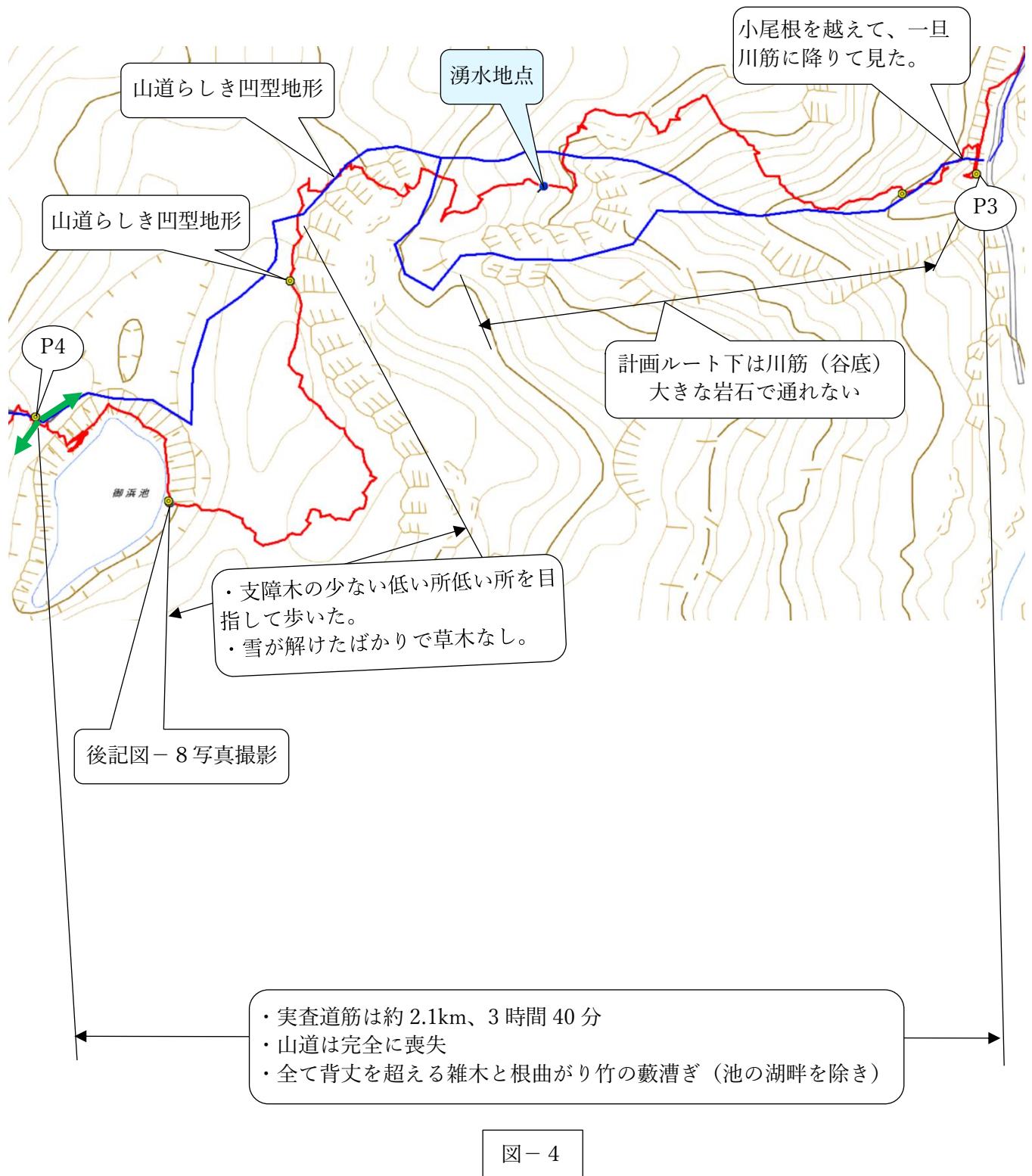
(2) 距離と所要時間の概算



(3) 区間拡大その 1 ;



(4) 区間拡大その 2；



(5) 区間拡大その3；



図-5

(6) 区間拡大その4；



2. 所感

この度の「(前者) (仮称)御浜池古道」と「(後者) 北月山古道」のトレイルは、長年念願でありました。前者の存在は昭和 50(1975)年頃に、別添-1 に触れて知りましたが、行きそびれていきました。後者の存在は平成 22(2010)年頃に知りましたが、これも行きかねていました。

特に御浜池は、羽黒修験道の聖地・秘所として山伏修行においては必ず訪ねている場所であります。御浜池は東補陀落と一体を成す秘所・拝所です。別記のとおり、2017(H29)年 8 月 26 日(土)、月山八合目から東補陀落間を往復しており、その時、チオンスはあったのですが、時間的都合上断念していました。その御浜池に行くにしても、別添-1 や別添-2 に記載されているとおりの(仮称)御浜池古道ルートを歩くことでした。 戻って、本年は早い梅雨明けとなつたが、このところは、戻り梅雨のような雨の日もあり不安定な気象であります。予報を注視している中で、この日は 1 日中晴れ、を確信して山に入りました。

(1) 東補陀落から月山八合目(剣ヶ峰)までは、今なお踏み跡があるだろうと想像はしていた。なぜならば、

- ・前記 2017(H29)年から今日まで 5 年程経過したが、踏み跡は残っているだろうと確信はあった。なお、その時は御浜池には行かず仕舞いであった。
- ・東補陀落および御浜池は、今日に繋がる羽黒修験道の聖地であり、一年に 1・2 回は歩かれているだろうと想像出来た。

(2) 問題は、にぎり沢沿い林道を離れる P3 地点から御浜池までの道(仮称)御浜池古道)が有りや否やです。案の定、想像していたとおり、雑木と根曲がり竹の藪中で、前記図-4 に記述したとおり、本の一部に道型(凹型地形)は見えたが、図-7 の状態になっており、歩ける状態ではなかった。なお、踏まれた土部分には樹木は生えていなかった、100 年経っても生えないと云われる。 よって、藪中の潜り易い所を判断しながら藪漕ぎを行つて來た。結果して、この区間 2.1km に 3 時間 40 分を費やした。一進一退で 572m/1 時間ということになった。普通に歩かれる山道であれば、傾斜を加味しても、私であれば 1.5 時間あれば十分であったが。

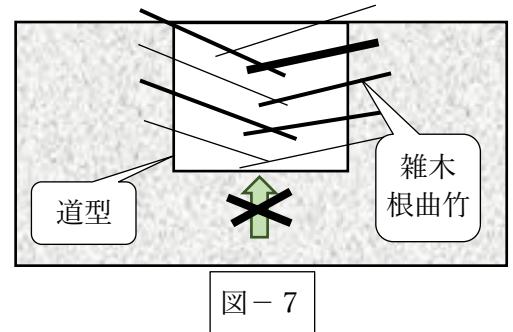


図-7

(3) 御浜池(図-8; 湖岸に降りた所で撮影)の湖面はエメラルドグリーンに光ついていて、きれいで、とても神秘的であった。平野部は気温 30 度を越えていたはずだが、水は少し温さはあったものの十分においしく頂いた。 湖岸で 20 分ほど飲食しながら休憩した後に、東補陀落岩峰と月山頂上に向かって合掌しつつ、出羽三山三語拝詞・同三山拝詞を唱え、大神に感謝の誠を捧げた。その間、熊や鹿でも表れないかと楽しみにしたが、表れずに残念であった。



図-8

(4) 羽黒～同八合目バス道路分岐 P6 からの北月山道は、下刈り・整備されたりっぱな古道であった。また、歩きに支障となる崩れた個所、倒木個所は皆無であった。P7 北月山荘から逆に上りを辿った場合、三角峰の当りで少し急坂はあったが、他には急坂はなく歩きやすい山道であった。

(5) 熊よけ対策。この地域は熊の生息地域であると云われていることは承知しており、ザックの両胸に呼子二つ、手元（ストック）に鈴一つ、左腰にナタを下げて構えた。

(6) (仮称) 御浜池古道の復元は望むべきもなく永久に復元されないだろう。しかし、同八合目から御浜池までは、定期的な下刈りを行い維持して欲しいものだ。前記のとおり、5 年も経過すると、膝から上部は雑木・根曲がり竹が両側から覆い被さって非常に歩き難くなっていた。

(7) 前記図-4 湧水地点で小休止したが、余りにも藪が濃いことから、ここで弱音が出て、引き返そうかと思った。しかし、私には仏魔同居しており、魔性様が仏性様に“絶対にこのルートで御浜池に行くのだ”と起請文を提出しているが故に、「嘘つき！」と言われることは不名誉であり、奮い立って再出発した。

3. (仮称) 御浜池古道の開削意義と御浜池の特性

その 1 ; 図-9・別添-5 参照のこと。P2 の川底には、東北電力月の沢発電所があったが、平成 12 (2000) 年 12 月 26 日 (火) の雪崩事故発生 (死者 3 名) 後に廃止された。しかし、2022(R4) 年 7 月 10 日 (日) 現在の国土地理院地形図には、廃止された (平成 20 年・21 年頃) 発電所と、導水管がまだ記されている。すると、少なくとも 2008(H20) 年までには、この P3 地点までは維持管理・作業用の車が通っていたことになるでしょう。

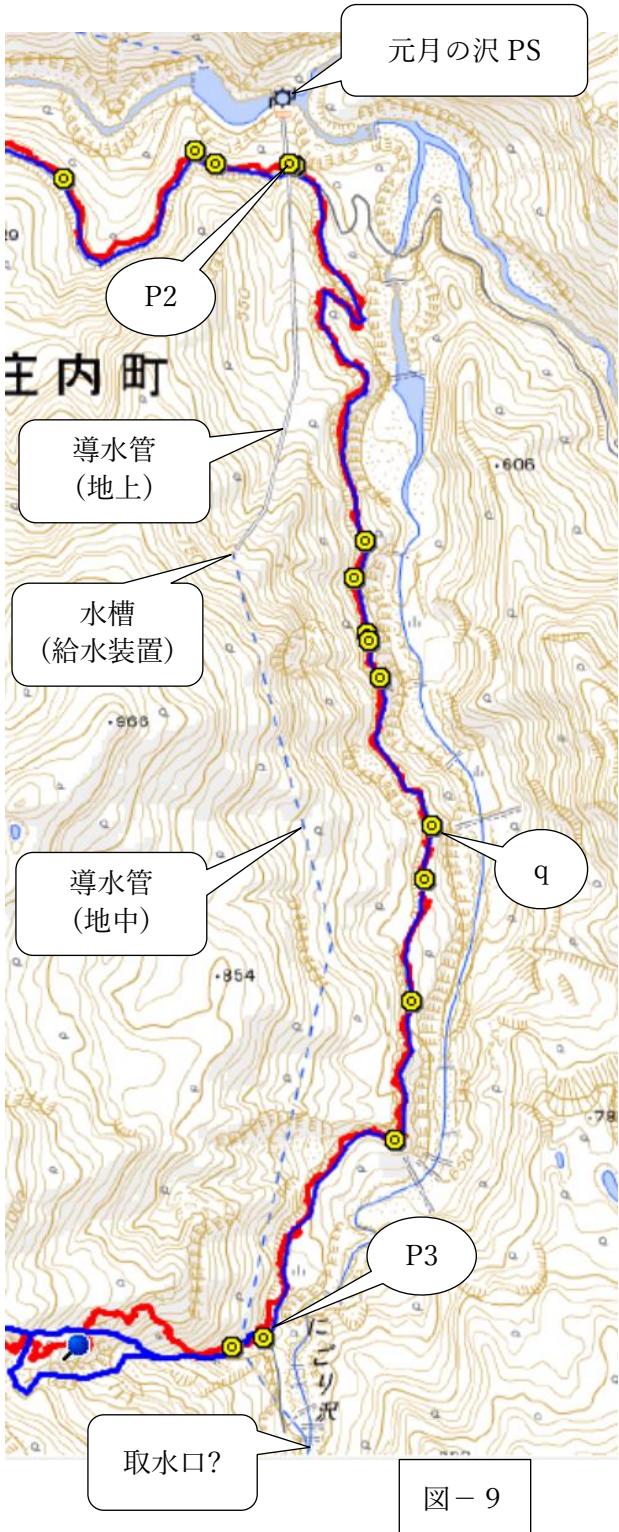


図-9

同発電所の着工時期は正確には把握していないが、おそらく戦後だろう（昭和30?年代）と思う、取水口や導水管の設置工事、その後の維持管理・修繕のために、長年に渡って関係者が往来したはずである。すると、昔から聖地と云われて来た御浜池・東補陀落はこちら側からは目前（2km先）である。そこまでの道を開削したくなるというのが人間の開拓欲求精神であろう。そんな過程を以って、この御浜池までの道が切り開かれたのではないだろうか。立谷沢川沿い集落の人々の月山詣では、北月山古道を利用したであろうから、その場合は、東補陀落・御浜池に行きたければ、八合目から下れば良かったはずである。

これらの推理を裏付けるようなものとして、別添-3の国土地理院地形図を用意した。

- ・別添-2aには、八合目から東補陀落まで山道がある、しかし、御浜池古道は無かった。
- ・別添-2bには、（仮称）御浜池古道が新しく記述された。
- ・別添-2cには、（仮称）御浜池古道はまた無くなってしまった。同発電所とその関連設備が全て完成し、その後は、同発電所上流部のにごり沢沿いへの人の立ち入りが激減し、引き摺られるように古道は荒廃し、廃道化したために国土地理院地形図から削除したことではないのか。

その2； 渡辺幸任著「出羽三山絵日記（杏林堂）」新版279～281頁に次のような記述があります。

「明治以前、内陸から最上川を船で下り、清川で上陸して立谷沢川沿いにさかのぼり、月の沢から濁沢沿いに登って御浜池に達し、そこで弁財天を拝み、さらに北に歩を進めて、天空にそびえる奇岩（立岩）で補陀落權現（弥陀薬師観音、三宝荒神）を拝み、弥陀ヶ原に向かうという登拝経路があった。月の沢から濁沢沿いに御浜池に遡る途中、地下に滝の存在を感じられる所があり、底力のある伏流水の落下音がするという。火口湖とも呼ばれる御浜池は弥陀ヶ原から雨水や雪解け水流れ込むのに、池から流出する沢はない。それでいてそれほど水位は変わらない。御浜池から地下に浸透した伏流水は、滝のような所を流れ、最後は月の沢発電所付近の山肌から流出していると言われる。御浜池の奥で仏性池（九合目）に向かう方に小屋が立っていたという。小屋の正面に濁沢大聖不動滝があった。・・・」

また、伊藤武著「出羽三山」には、「・・・最上川を船で下った道者が清川で上陸、あるいは、古口から板敷山を越えて来て、立谷沢川を遡り、月の沢から濁沢に沿って登り、御浜池で弁財天を拝し、

東補陀落の神仏を拝んで弥陀ヶ原を経て・・・」とあります。

それらは私にとって非常に興味深い記述である。

✓ 1 ; 私の前段想定ストーリーでは、月の沢発電所建設との関係のみで捉えていたが、この（仮称）御浜池古道は、出羽三山信仰に直接絡んで、必要に迫られ開削したというのが正確な史実であったのかもしれない。

✓ 2 ; 御浜池の水の動静は如何に

前記図-8のとおり、確かに池はすり鉢状になっており、写真では切れてしまったが、手前側も池の淵で、どこにもこの池から外に流出する川は存在していない。池周囲の等高線（図-10）からも分るとおり。池の淵の周囲を見ると前記図-8のとおりで、水面下にあった部分が茶色に変色して表れ、融雪期よりも減水していることが分った。

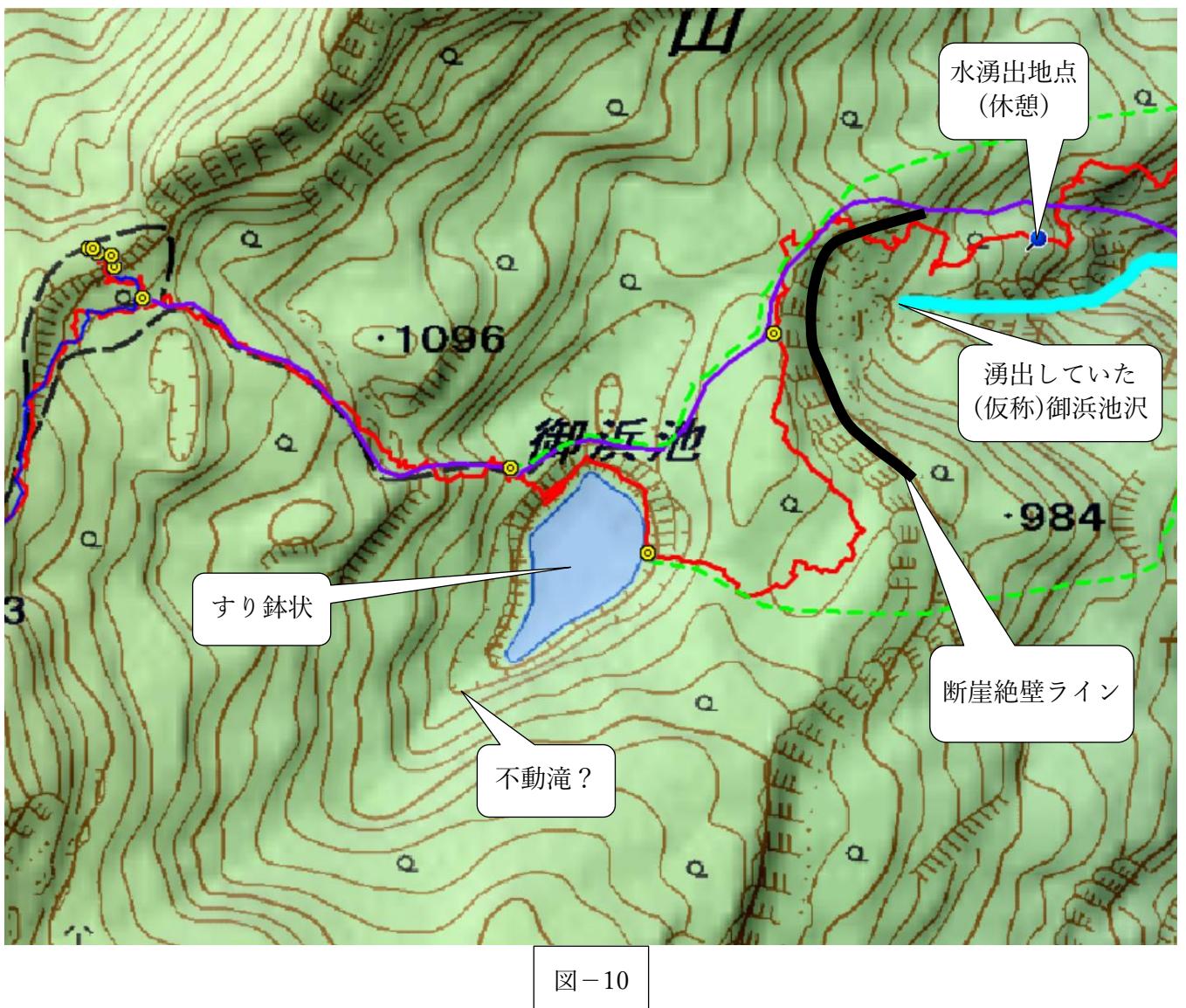


図-10

図-10に記したが、現地では水湧出地点に出くわした、また、（仮称）御浜池沢の先端部は断崖絶壁の形状で上部からの水流はなし、先端部から湧出している状況にあった。

✓ 3 ; 残念ながら「地下に滝の存在を感じられる所があり、伏流水の落下音」にはまったく気づかなかった。図-10中の断崖絶壁ラインに滝がないのか、当初から注視して来たがその部分には顕著な滝は見当たらなかった、見付けられなかった。

✓ 4 ; 濁沢大聖不動滝の位置は、前記図-8および図-10に記述した「不動滝？」の位置の当たりだろうか。

その3； 古銭の賽銭についてです。御浜池の淵で休息した場所で、図-11aのとおりの1枚の古銭を見付けた。四角の穴が空いていたことから現代のお金ではないと直感した。土に塗れて脆くなっていたが、きれいに土を落として見たら「寛永通寶」——日江戸時代を通じて広く流通した銭貨。寛永13年（1636年）に創鑄、幕末まで鑄造された。——と分った。私が拾ったものは不鮮明なのでネットから拝借すると図-11bのとおりである。



図-11a



図-11b



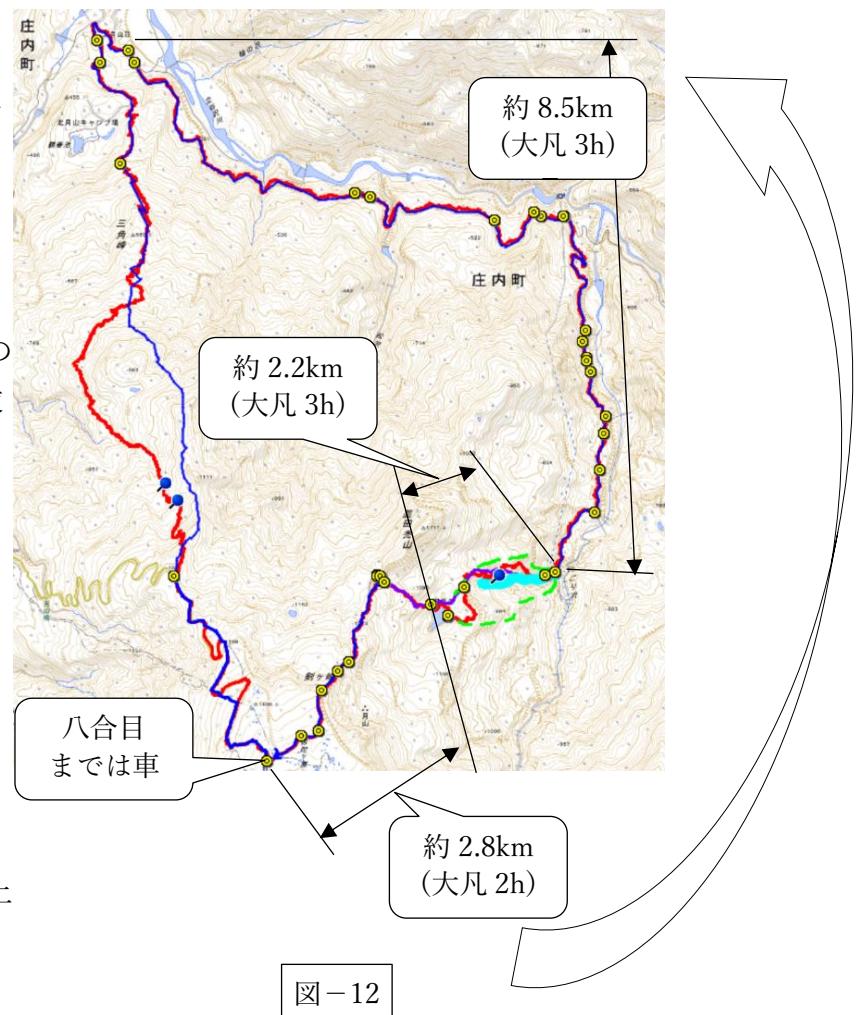
図-11c

なお、ネット上、西川町山岳会の2017(H29)年9月1日(日)、月山8合目～東補陀落～御浜池の山行記録の中に、図-11cのとおりの沢山の賽銭の写真があり、よく見るとここにも穴が四角の古銭があるようです。これらから、明らかに昔から参詣の対象となつて来たというこの証左である。

その4； 振り返って、今回は昔の道筋にこだわったが、すっかり廃道になっているのならば、同じ藪漕ぎならば、晩秋に、別添-4

図中の緑表示の「これ A ルート」と「これ B ルート」のいずれかが容易かもしれないと思った。落葉した晩秋は見通しが効き、かつ御浜池側から下った方が楽なのかもしれない。A ルートにおいては、古道筋に出会えるかもしれない。（図-12 を参照のこと。）北月山荘を拠点に今回とは逆回りで一周して見たいものだと、かすかな願望を抱いている処。晩秋は月山八合目までのバス運行はなくなる。しかし、車で行けるならばなお最高だろうが。あらためて、同図において、紫色・青色表示ルートは計画時の机上想定です。赤色ルートはこの度の実査トラックログです。

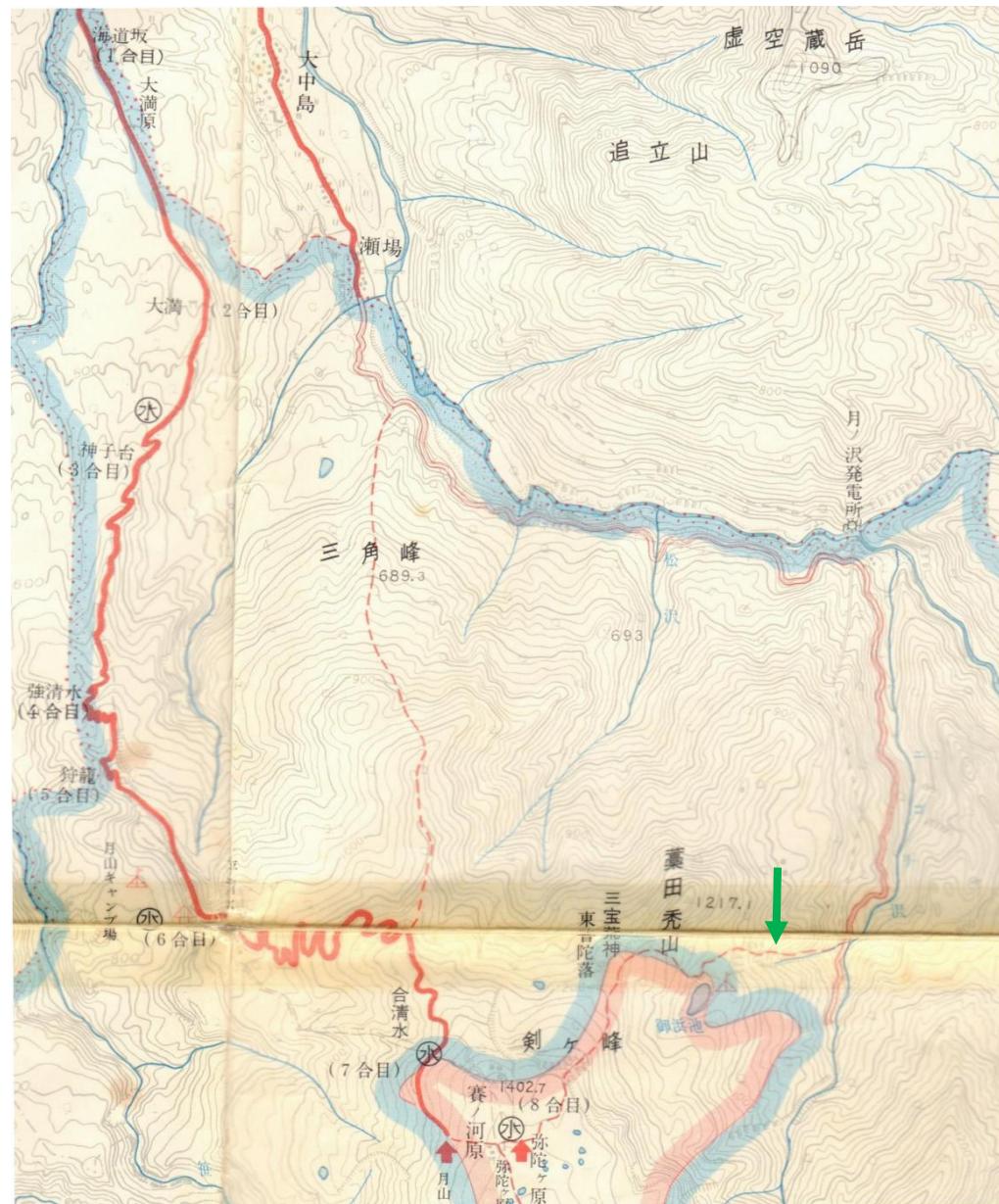
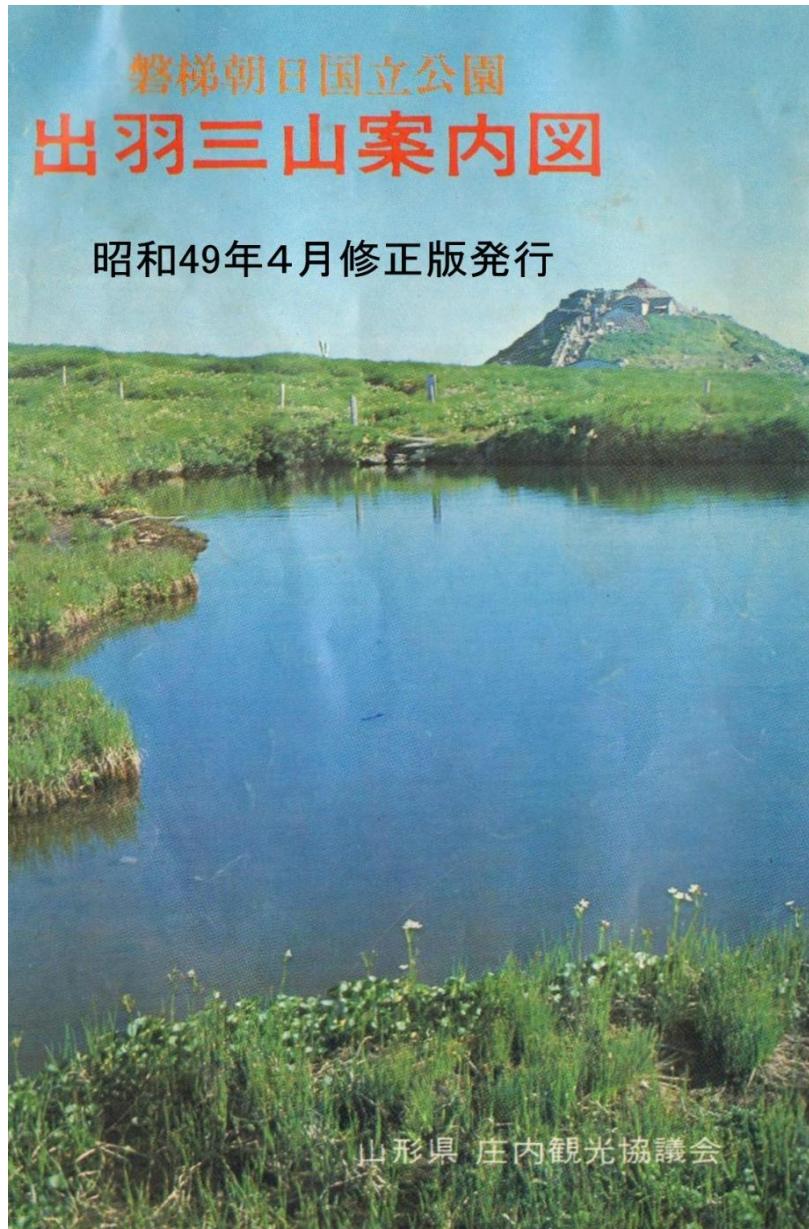
以上



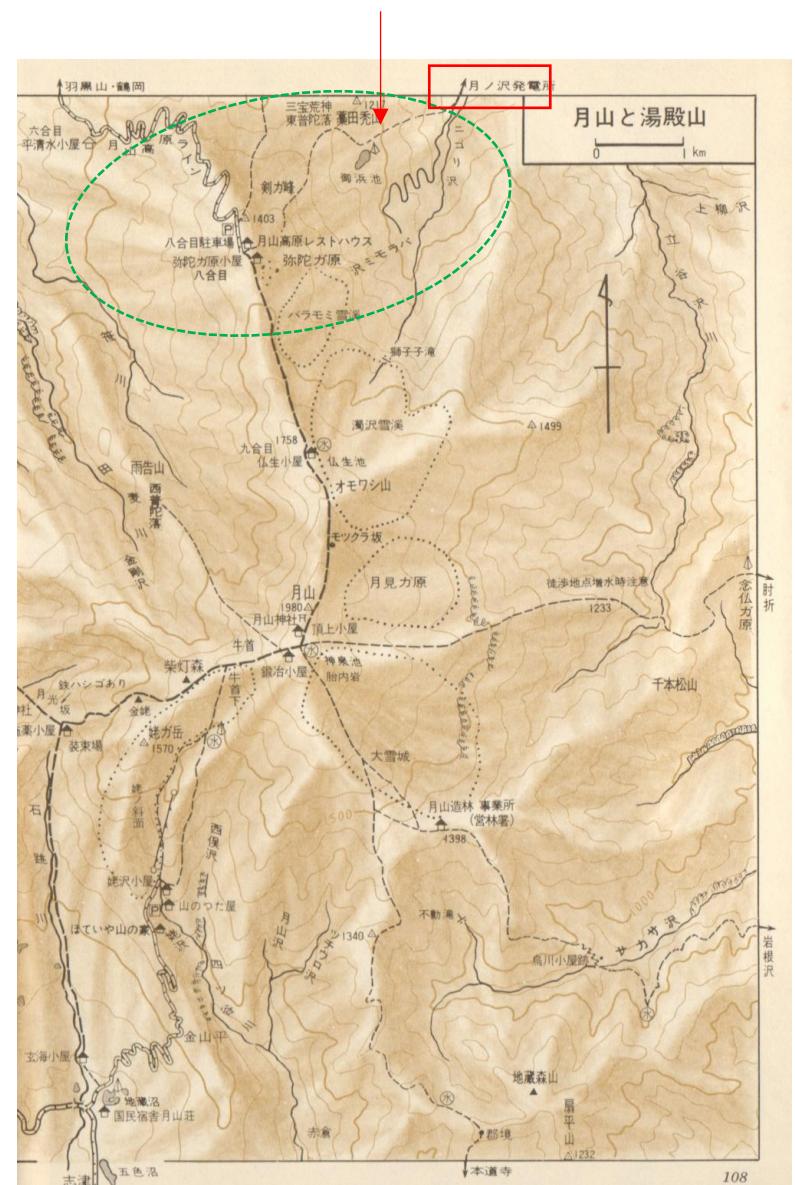
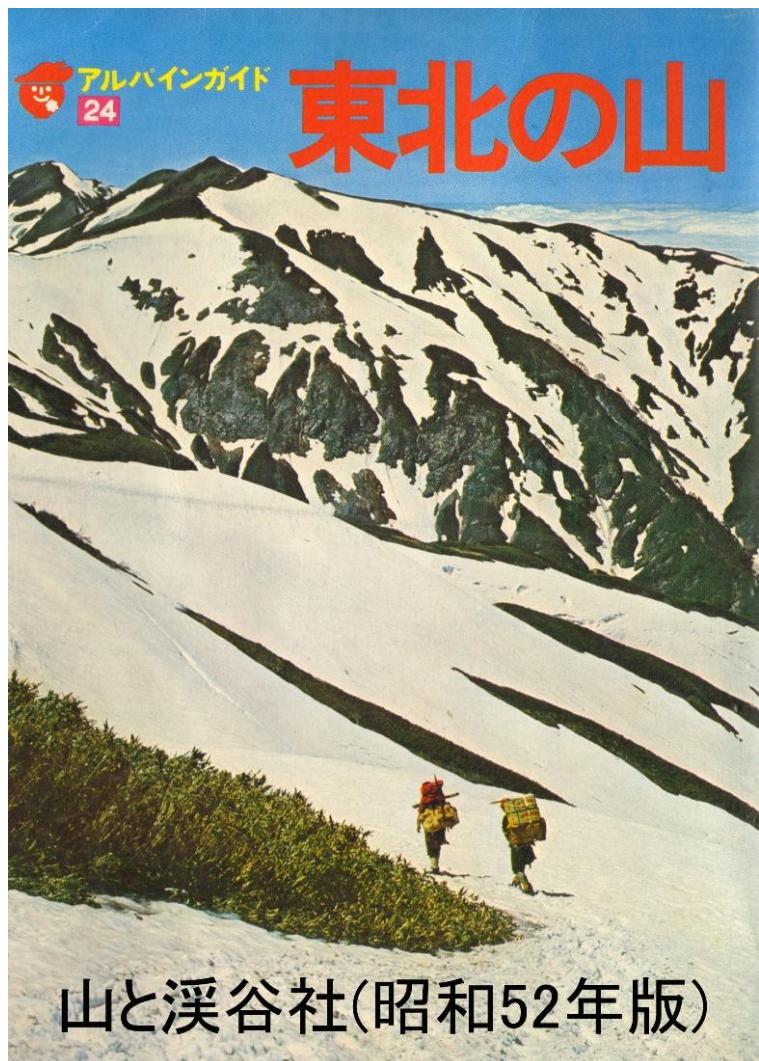
補完資料

- ・別添－1；出羽三山案内図（山形県庄内観光協議会 昭和49年4月修正版発行）抜粋写し
- ・別添－2；山と渓谷社にも掲載
- ・別添－3；もう二つの想定ルート
- ・別添－4；月の沢発電所のこと
- ・別添－5；今回の関連写真（一部）

別添-1；出羽三山案内図（山形県庄内観光協議会 昭和49年4月修正版発行）



別添－2；山と渓谷社にも掲載



別添-3；もう二つの想定ルート



図 h-1b
P3 点から(仮称)御浜沢本流を眺望

別添－4；月の沢発電所のこと

(仮称) 御浜池古道とは直接的には関係なさそうだが、本文に記述した関係性を踏まえて参考的に記載する。

山形県立川町雪崩事故

◆<なだれ>発電所点検作業員の4人が行方不明に 山形・立川

26日午前11時55分ごろ、山形県立川町立谷川にある東北電力「月の沢発電所」付近でなだれがあった、と県警余目署に通報があった。同署の調べでは、発電所を点検していた作業員5人のうち4人が行方不明となっている。 [毎日新聞 12月26日]

◆<雪崩>7時間後に救出も3人死亡、1人無事 山形・立川町

26日午前10時ごろ、山形県立川町立谷沢の東北電力の水力発電所「月の沢発電所」付近で雪崩があり、給水装置の保安作業に当たっていた同社員ら5人が巻き込まれた。1人は自力で脱出し、救助を求めた。残る4人は約7時間後に捜索隊が、雪の中から発見した。1人は意識があったが、残る3人は意識がなく、収容先の病院で死亡が確認された。

死亡したのは、山形県酒田市亀ヶ崎、東北電力社員、伊藤祐介さん(21)▽同県立川町肝煎、疋田建設社員、富樫登さん(61)▽同県羽黒町玉川、同社員、斎藤一美さん(45)の3人。同県櫛引町下山添、同社員、疋田武雄さん(52)は自力で歩ける状態。

東北電力山形支店によると、この4人と東北電力酒田技術センター土木課主査、丸山孝志さん(54)=山形県藤島町=の5人はこの日午前8時半ごろ、約1キロ上流の水槽を点検するため、同発電所を出発。積雪約1・5メートル。小雪で見通しは良かったという。同10時ごろに雪崩が発生し、4人がのみ込まれたが、丸山さんは自力で脱出して発電所に戻り連絡した。

発電所は月山(1984メートル)山ろくの標高400メートルのところに、水槽は標高約700メートルにある。雪崩は水槽の手前約150メートル付近で発生したと見られる。

酒田測候所によると、東北地方はこの冬一番の強い寒気が上空に入り込み、山形県庄内地方は26日未明から断続的にふぶき、午後2時過ぎには酒田市で最大瞬間風速30・7メートルを記録した。暴風雪・波浪警報のほか、午前8時48分からは雪崩注意報が出されていた。 [毎日新聞 12月26日]

A C H P 編集部

図 h-1a

- 全国 > 山形県 > 庄内町(庄内町) 1991年から2000年 -

SN	発生日時		被災箇所		遭遇者内訳(人) 注)死者は行方不明者含む			被害概要	気象状況	引用資料		
	日	時間	資料記載	固有名称	遭遇者	死者	負傷者			代表資料名	発行	
914	平成12年 (2000) 12月26日	10:00	東田川郡 立川町立 合沢 月 の沢発電 所付近	月の沢発電所付近	5	3		水槽点検 に向かう 東北電力 社員等5 人が雪崩 に巻き込 まれ、脱 出1、7 時間後救 出1、死 亡3。		山形新聞	平成12年 (2000) 12月27日	図 h-1b

月の沢発電所撤去工事の概要

長多阿
南田部
孝
豊*
誠**
章***

概要 月の沢発電所(最大出力3,000kW)は、運転開始当初から地すべりに起因する導水路変状が継続的に生じており、改修工事等の対策を講じながら運転を継続してきたが、地すべり活動が進行しており、検討の結果、地すべりを抑止・抑制することは極めて困難であり、保安確保の観点から発電所存続は限界との判断をし、平成20年6月に発電所を廃止することとした。

本稿は、発電所廃止に至る経緯、土木設備の撤去工事の概要について報告するものです。

キーワード：発電所廃止、発電所撤去

1. はじめに

月の沢発電所(表-1、写真-1、図-1)は、電力の需要増加に伴い昭和28年に株式会社鉄興社により建設され、昭和30年に東北電力へ譲渡された流れ込み式発電所である。発電設備一帯は国有林野内であり、磐梯朝日国立公園第3種特別地域に位置している。

設備のほとんどが急峻な地形に設置されており、車両乗り入れのためのアクセス道路が無く、導水路断面も極めて小さいことから、他発電所に比べ保守点検に非常に苦慮した発電所である。

を抑止・抑制することは極めて困難という結論に至り、平成20年6月に発電所を廃止し、主要設備を撤去することとした。

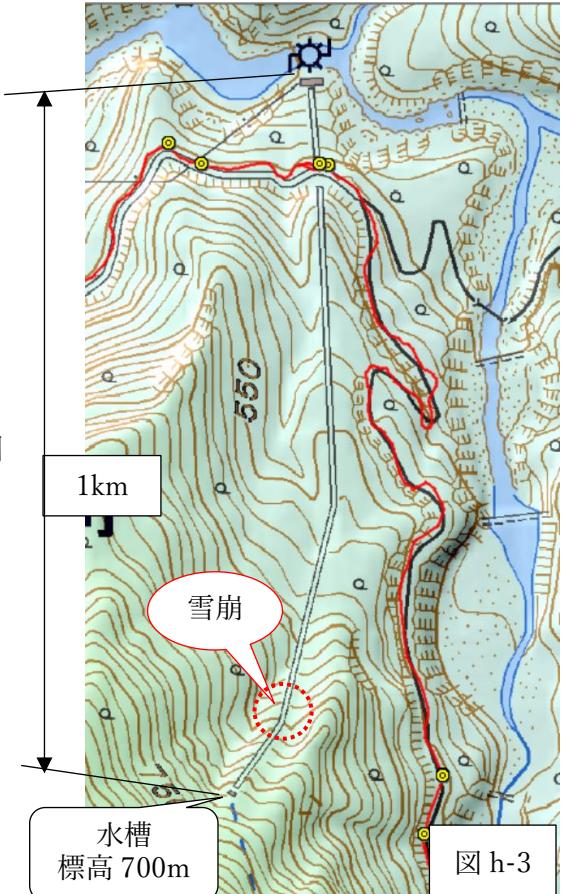
表-1 発電所諸元

項目	諸元
所 在 地	山形県東田川郡庄内町
河 川 名	一級河川最上川水系立谷沢川支流濁沢川
最 大 出 力	3,000kW
最 大 使 用 水 量	1.20m ³ /s
有 効 落 差	297.27m
道 水 路	鉄道トアド用路形 破壊ウバツ...

図 h-2

月の沢発電所の(前者)建設から廃止までの期間、ならびに、(後者)雪崩の詳細を知りたく、図h-2を入手したが、後者は記載されていませんでした。廃止は平成23(2011)年なので、58{2011-1953(昭和28年)}年間電力供給に活躍したということです。

図h-1aに基づき、国土地理院地形図に表すと、図h-3bに記述した場所が雪崩の場所のようです。



別添－5；今回の関連写真（一部）

